自治体女性史の成果と課題

石　月　静　恵

Achievements and Issues of Japan's Prefectural Women's History

Shizue ISHIZUKI

はじめに

「自治体女性史」という用語について、筆者は『桜花学園大学保育学部研究紀要』第23号で以下のように述べた(1)。

> 自治体（都道府県市区町村）が刊行した女性史を指しており、自治体が中心になって編纂した書籍のほか、地域の女性史グループなどが中心になって編纂し、それを自治体が刊行したものも含んでいる。

すでに、筆者は「日本近現代女性史と自治体史―都道府県史にみる女性史叙述を中心に―」を上記紀要に、また「最近の自治体史編さんと女性史」を『歴史評論』（855号、2021年7月号）に執筆した。そこでは、2001年以降に刊行あるいは刊行中の「都道府県自治体史」において女性に関する叙述が如何になされているかを検討することを目的とした。自治体史との関係で、「自治体女性史」についても触れたが、筆者が編集執筆に関わった『岐阜県女性史：まん真ん中の女たち』の編集過程を述べ、自治体女性史全体について以下のようにまとめた(2)。

> 自治体女性史は、自治体内の地域的偏りがないように配慮すること、個人情報保護や人権問題との関係などで、歴史研究や資料的価値が制約されることもある。また、大部の自治体史に比べると、編さんの期間も短く、一・二冊と分量が少ない。それでも、聞き書きや地域・歴史・女性問題に関心を寄せる人たちの求心力になり、見落とされがちな女性に関する資料の発掘や収集に、自治体が前向きに取り組むことの意義は大きい。二〇一〇年以降、自治体女性史の編さんがみられないことは残念である。

前述の2本の論文において、「自治体女性史」の内容について検討するには至っていない。そこで、本稿では、「自治体女性史」の果たした意義を考察することを目的とする。具体的には、自治体女性史の内容について、刊行の経緯、構成・内容、執筆者や特徴についてみていく。特徴については、系統的に論じてはいないが、筆者の関心に従い、戦前の女性運動を中心に検討している。

なお、自治体といっても都道府県市区町村と多岐にわたり、個人で検討するのは難しいため、ここでは、都道府県が刊行した「自治体女性史」を対象とする。

Ⅰ　自治体女性史の概容

都道府県単位の自治体女性史は、管見によれば47都道府県のうち、21都府県（青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県・茨城県・埼玉県・東京都・神奈川県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・三重県・京都府・奈良県・福岡県・佐賀県・熊本県・沖縄県）から出されている。それらを、『桜花学園大学保育学部研究紀要』第23号で、すでに書名・編集・発行・刊行年月を一覧表にした。ここでは、自治体女性史の判型やページ数、執筆者、構成や内容、また特徴について紹介していく。筆者は、『岩手の婦人：激動の五十年』（同書は、国立国会図書館にて閲覧）以外は、所有しているが、表紙の写真は適宜掲載した。また、縦書きの書物は、章・節のほとんどが漢数字での表記だが、引用を除き、便宜上算用数字で書いていることをお断りしておく。

1　『青森県女性史：あゆみとくらし』

青森県女性史編さん委員会編、青森県発行、1999年3月、A4判、292頁。

〈刊行の経緯など〉

「発刊のことば」は青森県知事木村守男が執筆、「発刊にあたって」は、青森県女性史編纂委員会委員長工藤英寿が執筆し、「女性の立場から近現代の歴史をたどっただけではない。民俗学的に本県女性の暮らしを捉えた。さらに女性の抱える問題を女性学的に分析している」と述べている。「発刊に寄せて」を執筆編集部会部会長長谷川成一が執筆、「本書は近現代を重視し、啓発書として発刊することが当初から決定していた」と述べ、1997年6月に編さん委員会が発足したという。

同書については、編さん委員であり執筆者でもある北原かな子氏が論考「青森県の女性史資料と自治体史」(3)を執筆されており、刊行までの経緯、資料収集、刊行後に研究会が発足し、県史資料編などに収集した資料が生かされたことが記されている。同氏は、『青森県女性史』が「啓蒙的な内容で、女性問題の啓発資料として刊行を意図された」と述べ、「発掘した資料そのものを掲載することがほとんどできなかったが、それらの資料群は、青森県史編さん室所蔵資料として新たな活用が可能となった」と述べている。

〈構成・内容〉

通史編、聞き書き編、近現代青森県女性史年表・青森県女性史関係文献目録の3部構成。

通史編は「青森県の女性史」の副題で、Ⅰ近現代女性のあゆみ（序章近世社会のなかの女性たち／第1章文明開化と女性の変革／第2章産業社会の発展と女性の社会進出／第3章大正デモクラシーと新たな女性像の模索／第4章昭和初期の青森県と女性たち／第5章戦時体制・戦争下の女性たち／第6章平和・民主主義の発展と自己変革を進める女性たち／第7章高度経済成長以降の女性の変化と運動）、Ⅱ女性の生活誌、Ⅲ青森県女性の現状と課題となっている。

〈執筆者など〉

巻末に「関係者名簿」として編さん委員会委員名簿、執筆編集部会名簿、監修、通史編執筆分担、コラム執筆者、聞き書きワーキンググループ、女性史資料収集協力員（18名）、編集協力などが掲載されている。通史編の執筆者の肩書は、学芸員、大学教員、大学院生など研究者であり、女性が多い。

〈特徴〉

通史編は、序章が「近世社会のなかの女性たち」について書かれており、本の内容は近現代である。各頁にほぼ写真が配され、４段組で、４段目は空欄で、写真の説明や表などが置かれている。

叙述としては、「早かった婦人矯風会結成」（34頁）という見出しで、婦人矯風会活動が弘前教会を中心に設立され、明治21年の活動が知られており、「本県での矯風会発足は全国的に見ても二、三位を争うほど早い時期であった」という。また、「県警察による廃娼」（63頁）という見出しで、「当時の県警察部長（淵上房太郎）が公娼制度廃止論者であったこともあり、県警察部は、業者の転業、すなわち公娼制度の廃止を実現する施策を推進」し、昭和９年10月20日から12月22日までに「全業者の転業、すなわち公娼制度の廃止が実施され」た。これは「群馬県、埼玉県、秋田県、長崎県に次ぐ」公娼制度の廃止であった。

「高い乳児死亡」（66頁）では、「当時、乳児死亡が全国一高かった本県」で「その原因の一つに多産が挙げられて」いたが、産児制限が「運動として広がることはなかった」という。「女性の「身売り」問題」（72～75頁）が項として設けられ、昭和８年県内3489人、県外3594人と書かれ、「十三歳になる少女の身売り証文が残されている」として、内容が紹介されている。「女性による消防組（団）」（75頁）では、女性消防組として最も早いのは、大正12年８月「百石村（現百石町）の少女消防隊」であり、「全国一の組織率」であると述べている。

２　『岩手の婦人：激動の五十年』

岩手県企画調整部青少年婦人課編集発行、1981年４月、A5判、534頁。

筆者は、本書を2021年３月に国立国会図書館で閲覧したが、現在（2021年９月１日）デジタル化のため閲覧不可となっている。この作業が終了すれば、閲覧が容易になると期待される。

〈刊行の経緯など〉

「発刊のことば」は、岩県知事中村直が執筆、1980年９月に「岩手県総合発展計画」を策定し、そこで「婦人対策についても明記」して、「岩手の婦人たちの軌道を記し、後世の婦人たちに遺し、伝えたいと本書の刊行を企画」したと述べた。青少年婦人課による「あとがき」では、「昭和五十四年四月、この企画に着手してから二年」で完成したという。

〈構成・内容〉

Ⅰ総論：激動の五十年、Ⅱ各論：戦前と戦後の対比の中で、Ⅲ資料編の３部構成。

Ⅰ総論は、昭和元年から昭和50年までの概説である。

Ⅱ各論は、第１章岩手婦人の軌道、第２章婦人と施策、第３章婦人の組織活動、第４章先駆

的役割を果たした岩手の婦人像の 4 章に分けられている。この第 4 章は女性人物史であり、「大原裁縫女学校設立者富永シゲヨ」、「女医第一号志賀ミエ」、「公選第一回国会議員菅原えん」など36人が掲載されている。第 1 章は明治時代から昭和50年までを 6 節にテーマ（教育・労働・政治・文化・人権・家庭）に分け書かれている。第 2 章・第 3 章はかなり詳しい叙述がなされている。第 2 章「婦人と施策」は、「第一節母性保健対策」、「第二節母子福祉対策」、「第三節婦人保護事業」、「第四節勤労婦人の労働対策」、「第五節農山漁業婦人の対策」、「第六節婦人の社会教育対策」、「第七節国連婦人の十年と岩手の婦人対策」という構成である。第 3 章は、女性団体を扱い、岩手県地域婦人団体協議会、岩手県農協婦人組織協議会、岩手県漁協婦人部連絡協議会、岩手県商工会婦人部連合会、岩手県母子福祉協会、岩手県生活改善実行グループ連絡研究会が取り上げられている。

Ⅲ資料編は、「図で見る岩手婦人の動向」と「岩手婦人の年表」が掲載されている。

〈執筆者など〉

「発刊のことば」で「編さんの任にあたられた熊谷佳枝氏をはじめ、多くの県内婦人皆さんの参加と協力により」上梓されたと記されている。巻末の「執筆担当」では、総論・各論第 1 章・第 4 章・資料編に熊谷佳枝の名があり、その他は個人名ではなく、県環境保健部医薬課・予防課、県福祉部児童家庭課、県商工労働部労政課、県農政部農産普及課、県教育委員会事局（ママ）社会教育課、県企画調整部青少年婦人課、第 3 章の女性団体はそれぞれの団体名が記されている。また、「校正は青少年婦人課の責任校正」とのことである。

〈特徴〉

1981年 4 月発行であり、自治体女性史としては最初に出された書籍である。「激動の五十年」という副題でもわかるように、昭和元（1926）年から昭和55（1980）年までを扱っているところに特徴がある。「年表」は、「岩手・婦人の動き」と「全国・婦人の動き」で構成されている。全体としては、現存する女性団体の戦後の活動が記されているが、ここでは、戦前の動きで岩手の特徴と思われる事項をみておく。1928年 5 月10日には、「処女会二千人公会堂に集まって県連合女子青年団発団式」が行われた。全国は前年10月である。1931年の 7 月には欠食児童が236町村447校9000人に達したという。1933年11月には愛国婦人会が「全国に先駆け婦人授産所」を開所し、入所式を挙行。1934年には、「娘身売り防止」を掲げ、愛国婦人会はお金の貸し付けや贈与、矯風会は県内50か所に相談所を開設した。1937年 7 月「国防婦人会がないのは岩手県だけと公会堂で発会」、同会県本部第 1 回総会は、1939年 4 月である。愛婦・国婦・連婦の統合が1941年 2 月と書かれているが、1942年 4 月 9 日「大日本婦人連合会岩手支部結成」と書かれている。同年全国の 2 月 1 日に「大日本婦人会結成」とあるので、岩手で「大日本婦人連合会」と名乗ったということなのか、詳細は不明である。戦後の1946年 1 月「婦人協力会を旧日婦会員が結成」と記されているが、全国的には、大日本婦人会の役員が新女性団体を担うことには消極的であったと思われるが、これも岩手の事情によるのか不明である。

3 『みやぎの女性史』

宮城県・みやぎの女性史研究会編著、河北新報社、1999年3月、B5判、706頁、4800円＋税。

〈刊行の経緯など〉

「発刊にあたって」は、宮城県知事浅野史郎が執筆、「みやぎ男女共同参画プラン」の「施策の一つとして、今回『みやぎの女性史』を編さん」したと述べた。巻末の「編さんを終えて」を「みやぎの女性史研究会菊池慶子」が執筆、「四年にわたる編さん・執筆作業」であり、「女性たちの日常の姿が知られる史資料の発掘と収集には、とくに多くの時間をかけてきました」という。「あとがき」は「宮城県環境生活部女性政策課長橋本一子」が執筆、平成6（1994）年4月に編さん開始、同年8月「歴史や家族社会学などの学識経験者六名で準備会を開催」、翌年4月に「みやぎの女性史研究会」を組織、「歴史資料の収集・取材・執筆などの業務を委託」、平成11（1999）年3月刊行予定で出発した。

〈構成・内容〉

「読みたいところから読めるテーマ別構成」と帯に謳っており、構成は、序章から9章と「女性史年表」、「聞き書き集」となっている。各章は、次のとおりである。序章宮城の女性の歴史、第1章家と女性、第2章女子教育のあゆみ、第3章働く女性たち、第4章女性と民俗、第5章性をひさぐ女性たち、第6章ファッションにみる女性の足跡、第7章表現する女性たち、第8章戦争と女性、第9章社会活動と女性。「女性史年表」は、430頁に凡例があり、431頁の明治元（1868）年から587頁の平成11（1995）年までで1年をほぼ1頁使い（2頁にわたる年もある）、宮城の女性・県内の動き・全国の動きに区分し、156頁となっている。「聞き書き集」は、「明治・大正・昭和・平成を生きた71人の女性たちの暮らしや地域での活動などをお話しいただき取りまとめた」とのことで、地域ごとにわけ、591頁から665頁があてられている。

〈執筆者など〉

編さん委員及び執筆者名の一覧が掲載されており、13名の編さん委員と同数の執筆者の多くは、大学教員であり、東北学院大学教授遠藤恵子が委員会委員長・宮城女性史研究会会長である。編さん事務局は女性政策課となっている。執筆分担者も明記されており、第1章・第2章・第3章・第9章は分担執筆であり、第4章から第8章までは一人での執筆となっている。

〈特徴〉

「年表」にかなりの頁数を割いているが、年表には、宮城県にゆかりのある女性たちの動向（誕生・学校教育・就業や社会活動など）がかなり丁寧に書いてある。たとえば、宮城県本吉郡歌津村（現歌津町）出身の山内みなは、本文第9章に「「女工」出身の労働運動家山内みな」という見出しで388～390頁で叙述されているが、年表にも1900年、1913年、1919年、1920年、1925年、1927年、1946年、1990年と誕生から没年まで記されている。

また、年表の記載には、出典がつけられており、年表をみて、さらに調べたい場合には役に

立つ。奥羽日日新聞と河北新聞の記事が年表に記載されており、年表づくりの基礎的作業を踏んで作成されている。「宮城県教育百年史」、「宮城県蚕糸業史」のほか学校史も活用され、教育関係や製糸業などの事項も充実している。

そのほか、宮城婦人矯風会の発会式を仙台であげたのが1887年７月と記載されており、青森より１年早いことになる。愛国婦人会は、1901年12月に宮城支部が創設され、事務所が日本赤十字社宮城支部内に設置されたと記載、出典は「愛婦宮城支部四十年史」となっている。大日本連合婦人会の発会が1931年３月６日だが、宮城県連合婦人会は、同年２月７日に創設され、出典は「宮城県郷土史年表」とのことである。1937年12月には、「県会で廃娼案を無修正可決」と記載されており、このころ、各県で経済的な理由もあり、廃娼が進んでいたことがわかる。大日本婦人会（日婦）宮城県支部結成式は、1942年６月14日になっており、全国が２月２日なので、若干遅いともいえる。

日本で初の社会主義女性団体「赤瀾会」に関係した秋月静枝と中名生（なかのみょう）イネについても本文（386〜388頁）で叙述され、「昭和戦前期、社会活動と女性たち」（392〜397頁）では、産婆多田ミトリ、阿部和子と乳銀杏保育園について書かれている。第８章が「戦争と女性」にあてられ、「銃後活動への動員」（348〜353頁）、「「大陸の花嫁」の養成と女性たちの渡満」（368〜371頁）についても比較的丁寧に触れられている。

４　『秋田県婦人生活記録史』（上・下巻に分れているが、一つの箱に収められている）

秋田県編、秋田県婦人生活記録史刊行会（秋田県青少年婦人課内）発行、1985年11月、A5判、上巻406頁、下巻398頁、上下巻で5000円（税込み）。

〈刊行の経緯など〉

「発刊のことば」は、秋田県知事佐々木喜久治が執筆、「女性だけの手による」ことを強調、「昭和五十六年から五年間にわたって編集作業」が行われた。「編さんにあたって」は、「秋田県婦人生活記録史編さん委員長長谷山包子」が執筆、「国連婦人の十年」を記念して、「秋田県に生きた女性たちの生活記録をまとめたもの」であるという。

〈構成・内容〉

上下２巻の内容については、凡例に書かれている。「明治初年から大正末までを上巻とし、昭和初年から「国際婦人年」に当たる昭和五十年までを下巻」としている。各編の序章に簡単な概説が書かれ、本文はほぼ生活記録が並べられている。本文の頁は、３分の２が生活記録、下３分の１が解説や資料が配されている。凡例によると「上覧の生活記録文は、本書編さんに際して実施した聞きとり調査をまとめた聞き書きと、募集した記録文を主として収録し、従来の単行本・新聞・雑誌・文集などからも一部引用」、「本文中には細かに出典を明示」したとのことである。

上巻は、次の編・章立てである。第１編明治に生きて（序章、第１章女性の夜明け、第２章女子教育の歩み、第３章婦人団体の誕生、第４章無視されていた女性の人権、第５章家の中の女たち）、第２編大正のめざめ（序章、第１章高まる婦人の意識、第２章大正の生活と婦人群像、

第 3 章女性の職場)、年表となっている。

下巻は、第 3 編昭和の嵐（序章、第 1 章恐慌と凶作、第 2 章婦人運動の高まり、第 3 章戦争の中の婦人)、第 4 編戦後の自立（序章、第 1 章立ち上がる婦人、第 2 章民主化の嵐、第 3 章学制改革と男女共学、第 4 章自立を求める婦人たち、第 5 章男女平等への道)、年表である。

〈執筆者など〉

編さん委員会は 5 名で、県社会教育委員連絡協議会会長の長谷山包子が委員長である。企画委員会は10名で、県地域婦人団体連絡協議会会長の土濃塚イマが委員長である。編さん事務局は県生活環境部青少年婦人課長小峰アイ子が事務局長で同課主事と事務補助の 3 名で構成されている。さらに、「生活体験を語ってくれた明治・大正生まれの婦人」と「資料収集に協力してくれた婦人」が掲載されている。

〈特徴〉

明治・大正を収めた上巻は、生活記録といっても、「生活体験を語ってくれた」（下巻392頁）人たちの体験記というより、新聞や書籍からの引用が特に明治期は多い。それでも、明治21（1889）年生まれで、数え年15歳で「酌婦として売られた」匿名の女性の聞き書きが掲載（103〜111頁）されている。大正期になると「秋田に、生き生きとした新しい女性の時代がおとずれた」（177頁）と序章で述べ、文芸誌「成長」（のち「生長」と改題）を創刊した京野世枝（のち鷲尾姓よし子）について叙述されている。1916年 8 月創刊で、1921年 4 月まで確認したというが、創刊号巻頭言の引用だけなのは残念である。

下巻の昭和戦前については、1929年秋田婦人連盟が結成され、「八年の全国婦選大会」で「軍備拡張予算に声高く反対した秋田の婦人たち」も、「戦争の嵐の中に引きずり込まれていった」と記されている（第三編序章 4 頁)。これについて、本文第二章「婦人参政権運動」（53〜60頁）では、「秋田婦人連盟が発足」（54頁)、「第一回全日本婦選大会に出席」、昭和 5 年「秋田婦人連盟を改組して同年十二月六日、婦選獲得同盟秋田支部を結成」と書かれており、1932年 4 月に「東北婦選大会が秋田市で開かれた」こと、1934年の第 5 回婦選大会で「満州事変で多数の戦死者を出した東北の実状を伝え、戦争の悲惨を再び繰り返すなと、勇敢に反戦を訴えた」ことなども叙述されている。本文に詳述されているのに、序章の叙述が不正確であり気になった。婦選運動の中心にいて、戦後初の総選挙で代議士になった和崎ハルの長女伊藤輝子の回想（53〜56頁）が掲載されている。下巻で特筆されるのは、戦争中・敗戦直後の体験についての記録が充実していることだろう。第三編第三章「戦争の中の婦人」、それに続く第四編第一章「立ち上がる婦人」にも「満州逃避行」や「従軍看護婦の戦後」など戦争に翻弄されながらも生きぬいてきた女性たちの姿が語られている。

5 『時を紡ぐやまがたの女性たち：山形県の女性の歩み』

山形県・山形県女性の歩み編纂委員会編著、みちのく書房、1995年 3 月、B5判603頁、5500円（税込み)。

〈刊行の経緯など〉

「発刊にあたって」は、山形県知事高橋和雄が執筆、国際婦人年から20年になり、「男女共同参画による山形県づくり」を進める一環と述べた。「編集後記」（602・603頁）で編さん事業の構想が「ミズ・コメット女性リーダー養成事業」の中から生まれ、1990年度から編さん事業が始まり、「編さん委員会、執筆委員会を設置し、編さんの方針、執筆内容について」、「度重なる検討」により基本方針を決定、資料収集、聞き取り調査を行い。5年かけて刊行にこぎつけたとのことである。

編さん事業が行われていた1994年9月3日・4日、「第6回全国女性史研究交流のつどい '94やまがた」が、山形市のホテルキャッスルで開催された。主催は実行委員会で、共催に新やまがたひゅーまんらいふフォーラム、後援は山形県・山形市・山形県教育委員会・山形県婦人団体連絡協議会・山形市女性団体連絡協議会・山形新聞・山形放送・NHK山形放送局・山形テレビ・各新聞報道機関となっている。「歓迎のことば」を山形県知事と山形市長が寄せている。しかし、この時『時を紡ぐやまがたの女性たち』刊行予定という話は出ていなかったように思う。実行委員長や実行委員および幹事名がつどいの予稿集に掲載されているが、自治体女性史との共通性はあまりみられない。第1分科会で「地方自治体の職員として」という東京都からの問題提起が行われているが、この時は「地域女性史と地方自治体の関わり方」を3種あげ、「市民事業でも自治体事業でも地域女性史づくりは、地域に行き、それを編む市民の主体性の確立、確保が重要」と述べているが、「自治体女性史」という言葉は使われていない。第2分科会の助言者に山形新聞社寒河江志郎の名があり、寒河江は山形県女性の歩みの編さん委員及び執筆委員を務めている。また、つどい共催の新やまがたひゅーまんらいふフォーラム事務局長玉津菊子は、つどい実行委員の幹事長であり、山形県女性の歩みの執筆委員である。

〈構成・内容〉

同書は、明治元（1868）年から昭和63（1988）年までを対象としている。

構成は、第1編明治に生きて（序章、第1章文明開化と山形の女性、第2章くらしの中の女性、第3章山形の産業を支えた女性たち）（3～118頁）、第2編大正のめざめ（序章、第1章大正デモクラシーと山形、第2章生活の変化の中で）（121～176頁）、第3編昭和の荒波（序章、第1章恐慌と凶作の暮らしの中で、第2章国策と婦人運動、第3章戦争の中の女性）（179～268頁）、第4編昭和―平成のみち（序章、第1章戦後の自立、第2章民主化の波、第3章激動する農村と女性の暮らし、第4章社会・経済の変化の中で、第5章男女共同参加型社会に向けて）（271～440頁）、メッセージ、資料編（年表、県内女性の生存者叙勲名簿、参考文献一覧、写真一覧、編さん委員、執筆委員、編さん協力者名）となっている。年表は456～574頁でほぼ1年1頁になっている。

〈執筆者など〉

編さん委員は7名で、山形大学教授横山昭男など研究者、山形県婦人団体連絡協議会会長、と前述した山形新聞社取締役寒河江志郎などである。執筆委員は9名、編集協力員43名、生活歴聴き取り協力者97名が掲載されている。資料提供者・協力者には山形県教職員組合女性

部長、元県婦人連盟事務局長、元県農協婦人部事務局などの肩書を持つ人たちと個人名、県立図書館、県立博物館、県立教育資料館、県生活福祉部児童課、県婦人就業援助センター、山形新聞社などが記載されている。編さん事務局は青少年女性課となっており、ここに玉津菊子の名がある。執筆分担の序章は、第1編から第4編すべて横山昭男である。

〈特徴など〉

各編それぞれに、女性運動について触れられているが、愛国婦人会など官製の女性団体の記述が多い。その中で、「県内初の婦人団体―荘内婦人会」（57～59頁）は、特筆される。1888年に「婦人自らの教養を高める」ことを目的に設立。『婦人会日誌』も残されているようで、10年後に「子守学級」を設置、「工女夜学会」も行ったという。また、「婦人会といえば、県内では愛国婦人会を指すほどになっていた」（131頁）といい、「遺族廃兵の救護から、子弟の教育、生業扶助、生計援助」（132頁）を行い、家政改善講習会開催（年表510頁）や山形夜間女学校も開校（年表516頁）、「職業紹介所と連携し、東京での女中職業斡旋」（年表520頁）など社会事業も行った。小作争議や女工争議も取り上げられ、「県内最初といわれる1927年の谷地町のメーデーにはすでに女性の姿がある」（206頁）と述べ、「短い生涯を農民運動に捧げた女性活動家の那須てつ」を紹介している。戦争中については、「大陸の花嫁」（217～223頁）など丁寧に取り上げられており、「山形県の女子学徒動員状況」（237頁）に学校名、期間、配属先など示されている。

6 『福島県女性史』

福島県女性史編纂委員会編著、福島県、1998年3月、B5判、554頁。

〈刊行の経緯など〉

「発刊にあたって」は、福島県知事佐藤栄佐久が執筆、1993年に事業に着手、女性政策室を設置、女性総合センターの整備を進めているという（現在「福島県男女共生センター：女と男の未来館」として運営―筆者註）。1993年4月に第1回福島県女性史編纂委員会を開催、基本方針を決定、「五年の歳月をかけて」完成。

〈構成・内容〉

2篇と年表で構成されている。第1篇福島県女性の足跡は、第1章原始・古代・中世（3～31頁）、第2章近世（第1節武士社会の女性観、第2節武家社会の女性たち、第3節人口構成に見る女性、第4節相続にみる農村の女性たち、第5節農村女性の労働、第6節町場の女性たち、第7節近世の文化と女性）（34～95頁）、第3章近代（第1節近代女性解放のあゆみ、第2節結婚・離婚・相続の法制度、第3節婦人団体―組織された女性、第4節女たちのしごと―農業・蚕糸・炭鉱、第5節商家のくらし、第6節産婆・看護婦・保健婦、第7節生活の中の習俗、第8節女子教育と女教員、第9節女たちの社会福祉活動、第10節近代の売買春をめぐる

制度）（97〜253頁）、第４章現代（はじめに現代を生きる女性たち、第１節社会福祉に生きた女性たち、第２節男女がともに学び合うために、第３節暮らしの中の女性たち、第４節農村女性の暮らしと労働、第５節増えつづける女性労働者、第６節心と声と力を集めて、第７節地域に根差す女性グループの新しい活動―県北地域の実例から、第８節真の男女平等をめざす行政の歩み、むすび）（255〜431頁）、第２篇福島県女性のすがた（１近現代に活躍した女性たち、２それぞれの人生、３県内各種女性団体）（435〜497頁）、福島県女性史年表（後ろから１〜36頁）。

〈執筆者〉

編纂委員は、学識経験者７名（うち丸井佳寿子が会長、関口はつ江が副会長）、女性団体等４名、報道機関４名、行政関係者10名。執筆委員42名、協力員37名。県関係担当者20名（うち女性史編纂嘱託員５名）である。執筆分担は、第１篇については凡例の次に示され、第２篇は執筆担当部分に記されている。

〈特徴〉

第１章の原始・古代・中世は概説的である。第２章の近世は、『新編会津風土記』などを用い、具体的に叙述されている。儒者上田文長が会津藩校の組織改革について「女師（女の教師）を任命し、士女（武士の娘）の教育に当たらせることを提案」（46頁）したという。上田の1791年の建議は取り上げられなかったが、提案されたことは特筆されよう。また、近世の人口構成を表で示し（54〜55頁）、女性の人口が少ないのは「間引きが恒常的に行われていたと考えるのが妥当」（53頁）と述べている。第３章近代では、「女工のストライキ」（172頁）に1883年に「たった一時間程度であったが、二本松製糸のこのストライキは、わが国で最初の女工のストライキであった」と書かれている。同書の年表には記載がなく、『日本婦人問題資料集成第十巻近代婦人問題年表』にも掲載されていないので、ほとんど知られていないことであろう。

戦後については、本稿ではほとんど触れていないが、本書では「七〇年代から「女性史ブーム」がひろがり始めた」（285頁）と述べ、「六〇年前後の婦人論研究会の活動、六〇年代半ばの『女性福島』などの発行」、「七八年二月には福島県女性のあゆみ研究会（吉田千代子代表）が結成」され、「県内各種女性団体」にも福島県女性のあゆみ研究会が掲載されている。さらに、「福島県母親大会の歩みから」（384〜401頁）が、大会の表も含め書かれている。ここで、母親大会について「女性の生活の場より出発し、たがいを啓発しあいながら、社会に向かってモノをいう運動である」とその意義を運動の内容とともに示している。

７　『いばらき女性のあゆみ』

いばらき女性史編さん事業委員会編、茨城県発行、1995年３月、A5判、550頁。

〈刊行の経緯など〉

「刊行にあたって」は、茨城県知事橋本昌が執筆、『いばらきローズプラン21』に「位置づけられた茨城県の女性史であり、明治・大正・昭和という大きな社会のうねりの中で、茨城の女性がいかに社会にかかわり、生き抜いてきたのかを女性の視点にたってしるしたもの」と述

べた。そして「大きな編さんのテーマ」として「旧来の性別による固定的な役割分担意識がまだまだ根強く残っており」、「それらの意識や社会的な慣習がいつどのように形成されてきたのかを究明すること」をめざした女性史と記した。いばらき女性史編さん事業委員会会長鈴木暎一が「編さんを終えて」（549～550頁）でプランが平成3（1991）年3月に策定され、基本目標「男女平等意識の確立」の「具体的施策の一環として「いばらき女性史の編さん」が位置づけられ」、同年11月に7名の委員からなる検討委員会の初会合があり、その後数回の会合で基本方針を決定、それに基づき「いばらき女性史編さん事業委員会」を19名の委員で構成、翌1992年9月に初会合。委員の14名が執筆を担当して、「実質わずかに二年数か月」で刊行できたという。

〈構成・内容〉

構成は、通史と聞き書き、年表の3部に分れている。Ⅰ通史は、前史（第1章原始時代、第2章中世、第3章近世）（14～54頁）、第1編戦前の社会と女性（55～171頁）は2章で、第2編戦後の社会と女性（173～334頁）は3章で構成されている。第1編は第1章新しい潮流・明治（第1節文明開化と女性たち、第2節日清・日露戦争と女性たち、第3節新しい教育と文化）、第2章大正から昭和（前期）へ（第1節大正デモクラシーと自由教育、第2節農山漁村の女性と暮らしぶり、第3節炭鉱・製糸工場で働く女性たち、第4節戦時体制下の女性たち、第5節「銃後の守り」とその重荷）である。

第2編は第1章敗戦と占領行政のなかで（第1節敗戦の混乱と耐乏生活、第2節占領軍と女性たち、第3節農村・教育の民主化、第4節家族制度の変化のなかで、第5節帰国女性と母子寮、第6節戦争未亡人たち）、第2章婦人参政権と女性の職場進出（第1節婦人参政権と女性の社会進出、第2節変わりゆく農山漁村と女性の地位向上、第3節婦人運動の展開、第4節売春防止法と婦人保護の動き）、第3章「高度成長」から二一世紀へ（第1節進む女性の社会参加、第2節経済成長と家庭生活の変容、第3節国際婦人年と権利意識の高揚）となっている。

聞き書き（335～455頁）は、「九九人が語る激動の時代」で、くらしのなかで・働く姿・学びの場から・戦争を生きぬいて・地域づくりのためにの5項に分けられている。聞き書きは「県内女性（聞き書き調査協力員）が同じ県内女性（話者）と一対一で向かいあい、話者が自分の人生を語り、聞き書き調査協力員が収録するという共同作業のなかでのテープをもとにして原稿を起こしたものを、さらに編集したもの」とのことである。5項の柱にそって、「各市町村および各婦人団体からの推せん並びに一般個人情報を合わせて、「話者」候補者約五〇〇人」が集まり、「五つの分野、地域、年代等のバランスを考慮」して「一〇〇人あまりを選び聞き書きを実施」、「全員の原稿は掲載できず、その方々については、話者名簿一覧にご氏名のみを列記」したという。年表（458～528頁）は、1868（慶應4、明治元）年から1989（平成元）年までを掲載した。なお、明治以降の「茨城新聞」すべてについて、女性関係の記事を一つひ

とつ拾い出してこれをカードに記入していく作業は大変な労力を要するものであった」（550頁）という。

〈執筆者など〉

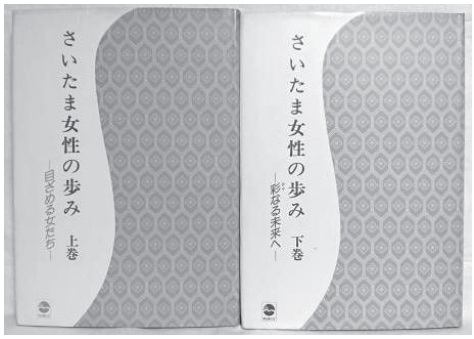
事業委員会委員19名の氏名が掲載されているが、肩書が記されていない。男性11名、女性８名で会長は鈴木暎一、副会長は鈴木聿子である。事業委員のうち、前近代分科会４名、近現代分科会10名、年表分科会２名、聞き書き分科会２名が執筆委員会を構成している。調査協力員として、新聞記事調査協力員10名（うち１名執筆委員）、年表調査協力員２名、史資料調査協力員２名、聞き書き調査協力員43名である。

〈特徴〉

近世は、『茨城県史料』の宗門人別帳などを用い、具体的な特徴が示されている。例えば「何歳で結婚したか」（47〜48頁）では、男女の結婚年齢の地域平均を算出、「県内では地域によって若干の相異はあるものの、総じてその身分、立場によって結婚年齢が異なり、当主や跡取り長男は、二五歳前後で一八歳前後の女性と結婚し、水呑百姓や同居の弟などはそれよりやや高い年齢になる」と分析、「本県では結婚年齢は低かったとみてよいように思われる」と述べている。明治の「民権運動のなかの女性」（64〜65頁）では、新聞記事から中川アサが「毎々来聴せる女丈夫」という記事を紹介している。明治中期以降「女学校を創設した女性たち」も紹介（96〜97頁）し、県内私立女学校を表（98〜99頁）にしている。聞き書きでは、「昭和二年三月、水戸の愛国婦人会茨城支部産婆講習所を卒業して、出入り三年実地教育のあと」（387頁）産婆となった女性の聞き書きで、産婆になる方法の一つを知ることができた。

８　『さいたま女性の歩み』上下巻

埼玉県編集発行、1993年３月、B5判、上巻359頁、下巻367頁。



〈刊行の経緯など〉

「発刊のことば」は埼玉県知事土屋義彦が執筆、刊行は「「男女平等社会確立のための埼玉県計画」の重要施策に位置付け、三年の歳月をかけて進めて」きたという。編さん委員小山博也「編さんを終えて」（下巻）では、「女性についての史資料は必ずしも多くない。そのような中で私たちは、非常に短期間に女性に関する史資料を収集したのではないか」と述べた。また、埼玉についての叙述は、「容易なことではない」といい、「明治以来の中央集権的国家においては、中央の影響が強く地方に投影され」ており、「東京の後背地であるという地政学的特質をもった埼玉県についてその独自性を見出すことは必ずしも容易なことではない」と述べた。

〈構成・内容〉

本書は、「明治期から昭和初期までを「上巻」、昭和戦前期から昭和五〇年ころまでを「下巻」

として、埼玉の女性にかかる事象を対象として記述」（上巻凡例）している。

上巻（副題「目ざめる女たち」） 第1章新しい文明に接して（第1節明治維新と女性、第2節地場産業の発展と暮らし、第3節女子教育の振興、第4節新しい職業分野への進出、第5節自由民権運動と女性）、第2章産業社会の進むなかで（第1節近代産業の発展、第2節家制度と生活の変化、第3節廃娼運動の展開、第4節女子中等教育の確立と現状、第5節文芸活動の芽生え、第6節日清・日露戦争と女性）、第3章大正デモクラシーの波紋（第1節新しい型の生活と女性、第2節大正デモクラシーと女子教育、第3節婦人諸団体の結成と活動、第4節産業構造の変化と社会運動の展開、第5節政治運動への参加と廃娼の実現、第6節華やかな創作活動）、年表（慶應4年・明治元年〜昭和五年）（313〜347頁）

下巻（副題「彩なる未来へ」）第4章十五年戦争を生きる（第1節社会的活動を広げる女性、第2節戦争のしわよせに悩む女性、第3節昭和初期の作家たち、第4節戦時下の教育、第5節女性の職場進出と労働動員、第6節窮乏化する生活のなかで）、第5章新しい憲法のもとで（第1節敗戦と民主化、第2節働く女性の自由と自立への旅立ち、第3節家族と福祉、第4節男女平等教育の推進、第5節各種女性団体の誕生、第6節人権問題としての売春、第7節移り住んだ作家群像）、第6章自立と共生への道（第1節高等教育への女性の進出、第2節創作活動の一般化、第3節変わる農村、第4節高度経済成長と生活の変化、第5節職場進出の本格化と雇用の平等へ、第6節強まった女性の社会的政治的参加、第7節国際婦人年と国連婦人の十年）、年表（昭和6年〜昭和50年）（265〜294頁）、女性行政の歩み：国際婦人年以降の取組（第1節行政組織の設置、第2節埼玉婦人問題会議の発足、第3節「婦人の地位向上に関する埼玉県計画」の策定、第4節「男女平等社会確立のための埼玉県計画」の策定、第5節女性行政施策の展開）、参考文献一覧

〈執筆者など〉

上下巻の巻末には、それぞれ、執筆分担と編さん関係者の一覧が掲載されている。執筆関係者は、平成2年度・3年度・4年度の編さん委員、調査・執筆委員、執筆担当者、編さん事務局の氏名が記されている。編さん事務局は平成2年度「婦人行政課」が3・4年度は「女性政策課」の課員が担っている。調査・執筆委員には埼玉県内だけでなく、女性史研究者を入れている。資料提供者・協力者の一覧が示され、生活記録文、聞き取り協力者、資料に分けて記載。執筆分担者は、小山博也、丹野喜久子、岩井サチコ、服藤早苗、塩田咲子、加藤千香子、根岸敏、弓削緋紗子、篠崎道子、木曽朗生、矢内久子、栗田尚弥、深尾凱子、藤井正子であり、国際婦人年以降の「女性行政の歩み」は、矢島真三、加藤幹夫、嘉村トク江、藤井正子、山本和生、柿沼トミ子、小口幸子、武田洋志、若狭衛、中田美子、新藤修次、森マコト、井上晶子、永峰治久、小林節である。

〈特徴など〉

明治初期、マリア・ルーズ号事件に伴い人身売買を禁止する太政官布告が出されたが、埼玉県は「全国で最初の廃娼県」（上16頁）となったという。しかし、業者の反対などから1877年場所を限定はしたものの存娼県となった。その後、「埼玉県非公娼同盟会」（上126頁）ができ

るなど廃娼運動が高揚、「公娼増設の県会決議の実現をついにはばんだ」（上128頁）という。

1917年全国小学校女教員大会開催、それに先立ち埼玉県小学校女教師大会を催した。この会は上から組織されたものであったが、北安達郡内女教員連合大会は、女教員の発意で開催、「議長選挙をはじめ一切女教員の手で行う自治的な組織」（上248頁）であった。1921年のILO会議に政府側の婦人代表として、埼玉県児玉郡の松本もとが選ばれ出席（上259頁）、「婦人および児童の保護問題」について発言した。1924年埼玉県婦人水平社が児玉郡で創立され、約200余名が参集（上278頁）、竹内政子が発議者であった。製糸工場でも、部落出身者に対する差別問題がおこり、婦人水平社が組織されたという。

下巻では、国際婦人年以降の「女性行政」を章として取り上げたところに特徴がある。また、「女性を結集した母親大会」（下161～165頁）の項を設け、1956年の埼玉県での第1回大会の経緯から叙述、「運動の問題点」にも触れている。教育に関しては、戦後の新制高校に県当局は「あまり乗り気ではなかった」（下190頁）ため、進展をみなかったが、女性の社会進出が進み、共学の必要性がいわれ、1971年以降の新設公立校は、「すべて男女共学の高等学校として開校」された。それでも、まだ男女別学や男女別クラスがあり、埼玉県婦人問題協議会は、男女共学制推進の検討を提言した。

９　『都民女性の戦後五十年』年表、通史

財団法人東京女性財団編集・発行、年表＝1995年11月、A5判、260頁、通史＝1997年3月、A5判、423頁、年表1751円（税込み）、通史2300円＋税。

〈刊行の経緯など〉

年表・通史の「発刊によせて」は、東京都知事青島幸男が執筆、1978年に「女性問題解決のための東京都行動計画」を全国に先駆けて策定、1991年に「東京都男女平等推進基金」を設置、翌年財団法人東京女性財団を設立、1995年東京ウィメンズプラザを開設したと述べた。「刊行にあたって」は東京女性財団理事長の鍛冶千鶴子が書いている。年表・通史とも「当財団は女性差別の解消を目的に活動を行っており、本書もその観点から出版したものである」と凡例で記している。

〈構成・内容〉

年表は、編集委員会執筆の「都民女性の戦後50年のあゆみ」（8～23頁）、「都民女性の戦後50年―年表：1943（昭和18）年～1994（平成6）年」（25～237頁）、「世界の女性の動き」（238～246頁）、「ノーベル賞女性受賞者一覧」（247～248頁）、「女性受賞者・東京都関係各章受賞者一覧」（249～253頁）である。

通史は、はじめに（1女性の人権確立に向けて、2飢餓とヤミの交錯、3これまでの50年・これからの50年）（18～39頁）、Ⅰ行動する（1飢えとの戦いからの出発、2女の視点での運動の高まり、3高度経済成長の光と影、4男女平等への第二波：国際婦人年を契機として、5

地球社会との強い絆：ナイロビ女性会議以後の動き）（42〜100頁）、Ⅱいのちとくらし（1飢えから再建へ：1945〜59年、2経済成長のなかで：1960〜74年、3エンパワーの時代：1975年〜）（102〜150頁）、Ⅲ働く（1働き続ける女性たち、2高度成長・合理化のなかで、3均等法をめぐって、4都の取り組みと労働の現場、5均等法改正に向けて）（152〜212頁）、Ⅳ学ぶ（1新教育の幕開け：敗戦から占領時代、2教育に後戻りの影：1950年代、3経済成長社会と高まる進学率：1960年代、4女性の教育を問い直して前進：1970年代、5生涯教育時代の離陸：1980年代、6 21世紀への課題：1990年代）（214〜270頁）、Ⅴ施策をすすめる（1新時代の幕開けと戦後女性施策：1945〜58年、2女性問題に取り組む行政の整備：1959〜74年、3「国際婦人年」を背景にした施策の展開：1975〜90年、4 21世紀にむけて　女性問題解決への新たな出発：1991〜97年）（272〜323頁）、Ⅵ表現する（1新しい息吹、2逆風を受けながら、3美へのあこがれ、4電波に乗って、5技術革新・高度成長のなかで、6フェミニズムの高まり、7それぞれの自己表現、8ボーダレスの時代、9“聖域”にいどむ）（326〜380頁）、「区市町村の女性施策（アンケート）」（394〜423頁）である。

〈執筆者など〉

年表は、板垣まさる・小川津根子・藤原房子の3人が編集委員であり、ジャーナリストである。巻末の「編集を終えて」には、「事実の発掘と整理という根気のいる仕事」を「女性問題に詳しい」ジャーナリスト江口裕子、「元国会図書館司書」沢西良子、牛島光江の協力を得たという。通史は、板垣まさる・江口裕子・小川津根子・関千枝子・藤原房子・松田宣子の編集・執筆で、執筆にはさらに松本侑壬子が加わっている。ほかに「お話をうかがった方がた」（通史381頁）の一覧があり、市川みさお・井手文子・大羽綾子・久保公子・隅谷茂子・高橋喜久江・林光・樋口恵子・松井やより・三井為友・吉武輝子・和田典子など活動家・研究者など幅広い人名が並ぶ。

〈特徴〉

年表は、東京都が成立した1943年からを対象としている。通史は、戦後の叙述から始まる章がほとんどだが、戦争中の状態から説き起こしている叙述も見られる。たとえば、通史Ⅲ働くの始まりは、「戦争末期、日本の生産現場では前線にかりだされた男性に代わり、あらゆるところで女性が働いていた」と記し、復員兵などがあふれ、「女は家庭にもどってもらう」といい、「女子三〇七万人が退職」と計算された。「しかし、女性たちは後退を認めたわけではない」と働き続ける女性の存在を示した。

10 『夜明けの航跡：かながわ近代の女たち』

神奈川県立婦人総合センターかながわ女性史編集委員会編著、ドメス出版、1987年11月、B5判、318頁、3300円（税込み）。

〈刊行の経緯など〉

「刊行にあたって」は神奈川県知事長洲一二が執筆、「この事業は、婦人総合センターで毎年行われている女性史の講座から生まれたグループが核となり、県内の郷土史、他の女性史研究

グループの方々、ご専門の研究家の方々にも参加いただき、まさに、県民女性の皆さんと自治体との共同作品として取り組んでまいったものです」と述べた。次いで、永井路子が「手作りの女性史に拍手」という文を寄せ、さらに、婦人総合センター館長金森トシエが「「共同作品」としての地方女性史―編集の経過」を掲載している。同書では、巻末近くに「かながわ女性史刊行へのあゆみ」（302～303頁）として、1983年3月に講座終了後、自主グループが誕生、翌年4月「かながわ女性史作成のための準備会発足」など、経緯が詳しく年を追って年表としてまとめられており、他の地域でも参考に出来るものとなっている。1985年7月に「聞き書き取材」が開始され、地域ごとに行われ、聞き書きは1987年まで継続した。1986年4月に第1回編集委員会があり、同年6回開催、翌年も6回の編集委員会を開催している。このほか、アドバイザー会議やワーキンググループが作られ、分担を決め例会を開催している。

〈構成・内容〉

構成は、3部に分れている。Ⅰは「年表でたどる女たちの“航跡”1868年～1945年」（“航跡”の光と影、1　1868年－1912年〈明治期〉、2　1912年－1926年〈大正期〉、3　1926年－1945年〈昭和戦前期〉）（22～155頁）、Ⅱ三つの時代：“地方”と“女性”の視点から（1　1868年－1912年〈明治期〉、2　1912年－1926年〈大正期〉、3　1926年－1945年〈昭和戦前期〉）（158～188頁）、Ⅲひたむきの年輪―80人に聞く女の暮らし（ぬくもりの女性史を編む、1　おいたちと暮らし―家庭・生活・民俗、2　はたらく姿―生業・職業・労働、3　学びの歳月―教育・芸能、4　大きなできごと―大震災・戦争）（192～286頁）

〈執筆者など〉

かながわ女性史編集委員会は、吉見周子・江刺昭子・加納実紀代・長田かな子・森山敬子・三浦澄子・金森トシエである。このうち、森山と三浦はワーキング・グループ代表であり、専門執筆者は、吉見・江刺・加納・長田・金森となっている。巻末には、ワーキング・グループメンバー表、それに73の県内女性史・郷土史研究グループ一覧が掲載されている。編集後記は、婦人総合センター・企画調整部・大村典子と鈴木京子の名がある。

〈特徴など〉

第1部の年表は、3段に仕切られ、上段が「神奈川の女性」、中段が「一般情勢」、下段が「解説」となっており。「文明開化とミシン」（24頁）、「教会結婚式第一号」（29頁）、「政治参加を呼びかける愛甲婦女協会」（32頁）などのほか、「一八九七年職業別日給比較表」などの表や「製糸工女就業契約書」（45頁）などの資料、「富士紡保土ヶ谷工場女工の作法の時間」（64頁）などの写真も掲載されている。第2部は、30頁と少ないが、時代の特徴を捉え、女性史としての概説の役割を果たしつつ、神奈川の女性の動きが理解できる叙述になっている。第3部は、４つのテーマに沿って聞き書きが配され、最初に全体のまとめがあり、聞き書きの経緯とそれ

ぞれの項のまとめとなっている。

11 『とやまの女性史：自立へのあゆみ』

富山県婦人団体連絡協議会編、富山県発行、1989年3月、A5判、453頁、2000円（税込み）。

〈刊行の経緯など〉

「序に代えて」は、「とやまの女性史」監修者の梅原隆章が執筆、「終戦後の約半世紀をふりかえって、女性の社会進出、地位の向上など、めざましい自立へのあゆみを、たしかな史料にもとづいて記録に残そうという本県の婦人団体の願望を、欣然として受けとめた中沖知事の発想にもとづいて企画されたもの」と説明している。富山県知事は、「新世紀を築くために」という座談会の出席者の一人である。「富山県婦人団体連絡協議会が、県の委託を受けて本書の編纂を決定したのは、昭和六十一年八月」（452頁）であったと「編纂を終えて」に書かれている。具体的な編集作業は、翌1987年4月に始まり、編纂委員会、執筆委員会などにより作業を進め、1989年3月に刊行した。

〈構成・内容〉

本書は、戦後を扱い、5章の叙述と、座談会「新世紀を築くために」（392〜407頁）、カラーで婦人週間ポスターを掲載、年表（414〜441頁）、生存者叙勲・県功労表彰を掲載している。叙述は、第1章苦悩の戦後生活を生きぬく（第1節昭和20年8月、第2節どん底の家庭生活、第3節引き揚げ女性の周辺、第4節戦争未亡人の再起）、第2章目ざめる婦人たち（第1節初めての政治参加、第2節活動しはじめる婦人の団体、第3節変わりゆく農村と婦人、第4節“母と子”をめぐる取り組み、第5節新しい教育と婦人）、第3章社会の変貌と自立への道（第1節婦人保護への道のり、第2節働く婦人の増加、第3節進む婦人の社会参加）、第4章真の男女平等をめざして（第1節「国際婦人年」と「国連婦人の十年」、第2節二十一世紀をめざす女性たち）、第5章婦人団体のあゆみとなっている。

〈執筆者など〉

巻末に「編纂関係者」が掲載され、監修梅原隆章、編纂委員13名、執筆委員10名が肩書なしで掲載されており、執筆委員の6名は編纂委員でもある。事務局は7名でこれも肩書は書かれていない。そのほか、「協力・史資料提供」の個人名と新聞社や図書館などが記されている。

〈特徴〉

第1章は、「苦悩の戦後生活を生きぬく」というタイトルだが、「序に代えて」で、監修者は「いわば前史」と述べ、「戦時下そして戦後と、どん底」を「筆舌に尽くし難い労苦を重ねながら生きてきた」と記した。まず、1945年8月の「富山空襲」から描かれ、書籍（『富山大空襲』など）などを用い、体験を語るような叙述になっている。女子勤労挺身隊の結成（12頁）とその派遣先なども書かれている。「大日本婦人会富山支部」が1945年6月に「国民義勇隊に再編」となっている（13頁）が、大日本婦人会は大政翼賛会・大日本翼賛壮年団とともに解散して統合され、国民義勇隊が組織された。諸所に、インクの色をかえて（淡い紫）説明文や表、コラムなどが配されている。

第５章「婦人団体のあゆみ」は、団体ごとに誕生から現在までの活動内容が、多くは年表を付して19団体書かれている。座談会は、富山県婦人団体連絡協議会長塩井外喜子をはじめ、富山県知事中沖豊、内閣総理大臣官房参事官菅原眞理子、早稲田大学政治経済学部教授西川潤、「とやまの女性史」編集事務局山澤和代が出席し、話力研究所北陸支所代表佳友嘉久子が司会を務めている。

12 『石川の女性史』（戦前編と呼ぶ）・『石川の女性史戦後編』

戦前編「石川の女性史」編集委員会著、石川県各種女性団体連絡協議会発行、能登印刷出版部制作・発売、1993年３月、A5判、444頁、2000円（税込み）。戦後編『石川の女性史：戦後編』編纂委員会著、石川県各種女性団体連絡協議会発行、能登印刷出版部制作・発売、2000年３月、A5判、469頁、2318円＋税。

本書は、２冊とも石川県が直接刊行したものではない。しかし、石川県各種女性団体連絡協議会（以下、協議会と略）の手で作成発行され、「戦前編も当時の越田曾登代課長がこれを認めて県からの補助を支給して下さった」（戦後編「はじめに」）とのことであり、戦後編も「これをお認めいただき、援助をして下さった県女性青少年課村井加代子・森岡智恵子歴代課長に深く感謝する」と書かれており、「自治体女性史」と位置づけここに掲載した。なお、判型は同じだが、戦前編はソフトカバー、戦後編はハードカバー仕様になっている。

〈刊行の経緯など〉

戦前編の「発刊にあたって」は協議会会長石野和子が執筆している。「はじめに」は、編集委員会委員長の梶井幸代が執筆、「石川県」という県名の由来からこの巻の構成を説明している。刊行の経緯は巻末の「あとがき」に書かれ、編纂について協議会の議題に上ったのが1989年のことで、決議の上、「女性史編集委員会」が作られ、勉強会から始め、新聞・雑誌などの記事を集め年表を作製、聞き取り調査なども行ったという。当初20人の編集委員が刊行までの４年間に、種々の事情で抜けていき、最終執筆者は11人だったと記す。

戦後編の「発刊によせて」は、協議会会長石野和子が執筆、「はじめに」は戦前編同様梶井が執筆している。戦後編も協議会参加団体から希望者を募り、勉強会から始めたが、少人数になってしまい、梶井が主宰する「北陸婦人問題研究所」の女性史講座のメンバーにより編纂に取り組み、県社会教育センター地下の「女性史編集室」で作業して完成に至った。

〈構成・内容〉

戦前編は、序章と８章の叙述と年表（378～433頁）である。叙述は、序章昭和の開幕（御大典、昭和恐慌）、第１章行政の流れ（１社会教育行政、２福祉行政の流れ）、第２章戦争と女性（１銃後の女性、２満蒙開拓と大陸の花嫁）、第３章女性の労働（１石川の紡と織、２女性の進出）、第４章女性団体の運動（１婦人団体、２女子青年団）、第５章女子教育（１昭和初期の女子教育、２女子体育、３戦時下の女子教育）、第６章地域に生きて（１農漁村の労働、２恐慌と戦時下の農村）、第７章遊廓、カフェー（１遊廓、２廃娼運動、３カフェー）、第８章文化（１衣食住、２芸能、３文芸、４宗教）である。

戦後編は、序章と 9 章の叙述と座談会『石川の女性史』編纂を終えて（321〜337頁）、協議会加入団体（339〜362頁）、年表（363〜459頁）である。叙述は、序章（ 1 女の夜明け、 2 動きはじめた女たち、 3 変革を求めて、 4 男女共同参画にむけて）、第 1 章戦争は終わった（ 1 敗戦・飢えとの闘い、 2 旧軍都金沢に平和町、 3 女たちの第一歩）、第 2 章新しい出発（ 1 新しく手にした参政権、2 新しい教育、3 新しく始まった女子教育）、第 3 章立ち上がる女たち（ 1 生活改善運動に取り組んだ女たち、 2 生活改善から婦人学級へ、 3 活動の拠点を求めて、 4 消費者運動のあゆみ、5 内灘闘争と女たち、6 手をつなぐ母親たち、7 立ち上がった未亡人たち）、第 4 章権利をめざして（ 1 社会に進出した女性たち、 2 母性保護の道を求めて、 3 男女格差をなくすために、 4 女が働き続けるために（保育所づくり））、第 5 章高度経済成長の中で（ 1 高度経済成長と生活の変化、2 パートタイムで働く女たち）、第 6 章生命と暮らしを守るために（ 1 火電・原発反対に取り組んで、 2 小松基地の騒音公害、 3 カドミウム汚染と薬害スモン、 4 廃油回収運動に取り組んだ加賀市の女たち、5 辰巳ダムをめぐって）、第 7 章戦後の女性と福祉（ 1 女性にかかわる福祉の流れ、 2 高齢社会と女性たち、 3 「売春防止法」石川県の取り組み）、第 8 章地域に生きる女たち（ 1 農村の女たち、 2 能登の出稼ぎの女たち、 3 漁村の女たち）、第 9 章多様な場で活躍する女たち（ 1 女たちの読書活動、2 市民活動として生まれた文庫活動、 3 身近な暮らしの中から、 4 石川戦後の国際交流の流れ）である。

〈執筆者など〉

戦前編の執筆者は10名の氏名が巻末に掲載され、「各女連」関係者14名（うち 1 名故人）、他の協力者17名となっている。巻頭の「発刊にあたって」には金沢大学の中野節子、県立博物館の本康宏史への謝辞、協議会加入団体名が記されている。戦後編は監修・編纂委員長梶井幸代と編纂委員 8 名、取材協力・執筆協力41名、それに特別協力として宮本憲一・英子の名がある。なお、宮本夫妻は、座談会に参加している。

〈特徴〉

戦前編の第 4 章 1 婦人団体には、全関西婦人連合会に関係して「金沢連合婦人会」が設立されたこと（127頁）、婦選獲得同盟金沢支部（131頁）、北陸婦選大会（133〜135頁）についても書かれている。また、女子青年団・女子勤労挺身隊（159〜175頁）についても、団員数などの表が掲載され、実態が理解できる。第 7 章 1 遊廓では、歴史から書かれ、遊廓所在地の一覧も1884・1894・1912・1926年の表が掲載されている。また、同章 2 に廃娼運動が設けられ、困難な中でも県内で廃娼運動が展開されたことがわかる。

戦後編の叙述は、 1 頁の 3 分の 1 弱を用語説明や写真・表などにあてている。戦後の女性たちの状況や活動を描いており、内灘闘争（122〜128頁）、母親運動（129〜138頁）、保育所づくり運動（180〜189頁）などが具体的に地域女性史として描かれている。

13 『ふくい女性の歴史』

ふくい女性の歴史編さん委員会編、福井県発行、1996年 3 月、B5判、517頁。

〈刊行の経緯など〉

「発刊にあたって」は、福井県知事栗田幸雄が執筆、福井県生活学習館の開館や財団法人ふくい女性財団の設立も同年度におこなわれたことを紹介、本書刊行を女性行政の進展の一環として位置づけている。「はじめに」を本書監修者の福井大学名誉教授坂本正親が執筆、第1回編さん委員会は1994年4月に開き、翌年度3月末までの2年間での刊行をめざした。県青少年女性課が主管して、1993年度から3年間事務局が置かれた。

〈構成・内容〉

本文4章と年表（477～506頁）で構成されている。本文は、第1章若越の歴史の流れの中で（1不条理な運命、きらめく才能・人材、2封建制、近代化、戦争に生きる、3混乱超え花ひらく女性の戦後社会）、第2章歴史の中の女性の光と影（1原始・古代：過酷な暮らしとロマン、2中世：乱世にたくましく生きる、3近世：多彩に生きる封建の時代、4明治以降：近代化の中で才能開花）、第3章進む近代化と戦争の中で（1「文明開化・良妻賢母」と目覚める女性、2大正デモクラシーの幕開けと生活、3近づく戦争の不気味な足音の中で、4悲惨な太平洋戦争と女性たち、5終戦、新しい光求め立ち上がる女性）、第4章二十一世紀へ新たな開花（共同参画と均等で活力ある社会）である。

〈執筆者など〉

編さん委員は、坂本正親を含め、8名（男性5名・女性3名）であり、巻末に肩書も記されている。女性は、福井大学教育学部助教授田中光子、ふくいの生活と婦人問題研究会代表辻きぬ、ユー・アイふくい福井県生活学習館館長政野澄子である。執筆者は、編さん委員を含む28名である。

〈特徴〉

第1章は、概説になっており、古代から現在まで叙述している。第2章は、人物誌になっている。古代の「縄文時代の女性」（91～92頁）、「弥生時代の女性」（92～93頁）、「古墳時代の女性」（93～95頁）は、時代の中での女性の状態の説明が中心だが、古墳時代には「女性の首長を葬ったと考えられる古墳」として「本県では福井市の龍ヶ岡古墳が確実にそうである」と述べている。紫式部も「多感な青春時代に武生へ」として描かれている。明治以降は、伝記として書かれている。林歌子（166～170頁）や奥むめお（196～201頁）のほか、岩崎ちひろ、津村節子、山崎朋子も掲載されている。第3章は、小見出しをつけて叙述され、近代以降の女性史通史となっている。なかでも「従軍慰安婦問題」（384～387頁）を従軍した男性のアンケートを用いて描いていることは少人数ではあるが評価出来よう。

14 『岐阜県女性史：まん真ん中の女たち』

岐阜県女性史編集委員会編、岐阜県発行、2000年10月、B5判、591頁。

筆者は、『岐阜県女性史』の準備段階から関わり、編集委員として参加、執筆を行った。そして、同書刊行後、「全国女性史研究交流のつどい」の開催を同じく編集委員であり、執筆を担当した度会さち子とともに提案、2001年の第8回つどいの実行委員長を務めた。この間の

事情と本書については、何度か執筆しており、参照いただきたい(4)。

〈刊行の経緯など〉

「発刊のことば」は、岐阜県知事梶原拓が執筆、飛騨・美濃合併120周年記念事業の一つとして刊行されたこと、「県民多数の参画を得た聞き書き調査活動は、県として初めて」と述べた。「はじめに」を編集委員会座長で岐阜大学教授の松田之利が執筆している。巻末の「編集を終えて」は、岐阜県女性史編集室長柏和子が執筆、経緯が語られている。まず、1996年度に懇話会と準備会を開催、1997年4月第1回編集委員会を開催、一般公募による史資料収集協力員10名と聞き書き等調査協力員49人が活躍した。聞き書きは県内を6地区に分け200人余りから聞き書きを行った。それらすべては本書に掲載できず、別冊聞き書き集『この道を生きて』を作成した。筆者の記録では、2000年8月までに30回の編集・専門委員会を開催している。

〈構成・内容〉

本書は、第1編叙述、第2編聞き書き集（407〜458頁）、第3編年表（460〜562頁）の3部で構成されている。第1編は、前史（近世の家と女性）、第1章知と技を求めて：良妻賢母主義教育を超えて（1生きるために女子も手習い、2先進としてのスタート、3女子中等教育の廃止、4良妻賢母主義教育のはじまり、5強まる職業志向、6男女平等の教育へ）、第2章働く女性（1女性労働史をみる視点、2農山村の暮らしと女性、3繊維業の女性労働者、4地場産業と女性、5戦時体制下の女性労働、6経済復興から高度経済成長へ、7女性労働の現在）、第3章戦争と女性（1しのびよる戦争、2銃後の女性、3満州移民と大陸の花嫁、4戦争と性・母性、5戦時の暮らし）、第4章女の性（1県民の性意識、2売春防止法制定以前、3売春防止法制定以後、4現代の男女）、第5章生活と文化（1家と女性、2暮らしのなかの女性、3民衆文化の近代的展開と女性、4戦後文化の諸相と女性）、第6章女性の運動（1女性の目覚め、2女性運動の高揚、3法的男女平等のもとで、4男女共同社会をめざして）であり、「21世紀の男女共同参画社会をめざして」という執筆者による座談会（403〜406頁）が掲載されている。第2編の聞き書きは、1人1頁で50人掲載している。第3編年表は、ページの下7分の2程度を解説に充てている。

〈執筆者など〉

編集委員会は、研究者を中心とする叙述の執筆者8名と、資料提供者など3名に、県職員7名、女性史編集室6名に嘱託職員5名で構成。一般公募の史資料収集協力員10名、聞き書き等調査協力員49名が参加した。年表は、女性史編集室の職員が原案作成、執筆者の意見を取り入れた。

〈特徴〉

近現代を中心とする叙述となっており、教育・労働・戦争・性・生活と文化・女性運動の6

章からなる。近世についての叙述が序章としておかれている。「戦争と女性」に1章を充てたところに特徴があるといえよう。その他の章は、近代から現代へ時代を追って、描かれている。

15 『三重の女性史』

三重の女性史編さん委員会編、三重県文化振興事業団企画発行、2009年3月、B5判、285頁。

〈刊行の経緯など〉

巻頭の「発刊に当たって」は、まず三重県文化振興事業団理事長武村泰男が執筆。次に監修に当たった伊藤康子が「暮らしたい三重を築くために」を執筆。その後、三重県知事野呂明彦が「発刊に寄せて」を執筆している。「あとがき」を三重県男女共同参画センター所長鈴山雅子が書いており、「センター開館一〇周年の二〇〇四（平成十六）年に」企画、「五年計画で取り組みました」と述べている。

〈構成・内容〉

本書は、第1編通史、第2編聞き書き、第3編年表（210～258頁）で構成されている。第1編の通史は、序論働き抜いた三重の女性、第1部文明開化の中で（第1章近代地域社会の成立と三重の女性、第2章近代地域社会の確立と女性の多様な社会進出）、第2部大正デモクラシーから戦争支援へ（第1章大正・昭和恐慌期の女性、第2章満州事変・戦時体制下の女性）、第3部民主主義の発展を支えて（第1章占領期の激変と民主化、第2章経済成長の光と影、第3章「平等・開発・平和」の追求）である。聞き書きは18名が掲載されている。

〈執筆者など〉

序論は、監修者の伊藤康子が、第1部は梅村佳代が1節を除き執筆、第2部は西川洋が2節を除き執筆、第3部は伊藤康子と佐藤ゆかりが執筆している。聞き書き執筆・編集は、板倉加代子と竹内令が担当、年表の執筆・編集は佐藤ゆかりと山崎まゆみが担当している。

〈特徴〉

自治体女性史としては、最も新しい書籍である。ソフトカバーで、ページ数も多すぎず、判型はB 5と大きいが、持ち運んでテキストなどにも使える軽さである。図表や写真・コラムも掲載されている。参考文献一覧ももっと調べたいと思ったときに役に立つ。戦前の運動では、「地域婦人会と全関西婦人連合会」（56～58頁）の項があり、「全関西婦人連合会大会参加者」の一覧が掲載されている。戦後は、近江絹糸人権争議（121～124頁）や四日市公害問題（136～141頁）など、三重県における特徴的な活動を取りあげている。

16 『京の女性史』

京の女性史研究会編、京都府発行、1995年3月、A4判、148頁。

〈刊行の経緯など〉

「発刊のことば」を京都府知事荒巻禎一が執筆、「KYO のあけぼのプラン」に基づき、1991年度から「四年の歳月をかけ進めて」きたと述べた。「監修・編集にあたって」は、京都府立大学名誉教授門脇禎二が執筆、「古代から現代までを通じた京都の女性史としては、初めて」と記し、「最後の編集作業には、大阪外国語大学教授脇田晴子・京都橘女子大学教授田端泰子と門脇があたりました」と書いている。編者「京の女性史研究会委員」は、門脇を会長、脇田を副会長として、ほか13名の研究者で構成されていた。

〈構成・内容〉

本書は 3 部に分かれている。第 1 部京都・女性のあゆみ（ 9 ～72頁）は、叙述で古代から現代までを取り上げ、ところどころにコラムを置いている。第 2 部私たちのことばで語る「女性史」（73～123頁）は、 1 女の暮らし、 2 なりわいと女たち、 3 学び、活動する女たち、 4 戦争と女たちの 4 章にわけて、130名の聞き書きを要約して掲載している。第 3 部は年表・資料等（127～148頁）である。

〈執筆者など〉

第 1 部の執筆者は、門脇禎二・京楽真帆子・脇田晴子・田端泰子・加藤美恵子・光田京子・藤目ゆきの 7 人であり、コラム執筆者は16人である。第 2 部は、京の女性史研究会会員と同補助員が執筆者として掲載されている。この第 2 部を作成するに当たり、「編さん協力員」として、京都府連合婦人会、京都市地域女性連合会、京都府婦人の船同窓会のメンバー66名が「聞き取り調査の語り部さんとの連絡調整、現地の案内、聞き取り記録の作成など」に協力したとのことで、巻末に氏名・所属が掲載されている。

〈特徴〉

京都という歴史的特徴を生かし、古代からの通史が描かれている。また、1895年生まれから1940年生まれの130名の聞き取りを掲載している。

なお京都では、戦後についてではあるが、自主的女性史が出版されていることを付記しておきたい。1972年の「平塚らいてう展」を契機に同実行委員会メンバーを中心に「京都婦人のあゆみ研究会」を発足、『京都婦人のあゆみ：京都戦後婦人運動少史』を発刊し、研究会をいったん解散した。その後、研究会を再始動し、『京都女性のあゆみ第 2 編：資料と年表でつづる国際婦人年から二十年』を1989年 9 月に出版している。同書は、B5判、779頁の大部なもので、418頁の資料編と年表（419～768頁）となっている。

17 『花ひらく：ならの女性生活史』

ならの女性生活史編さん委員会編、奈良県（奈良県女性センター）発行、1995年10月、B5判、524頁。

〈刊行の経緯など〉

「発刊のことば」は、奈良県知事柿本善也が執筆、「奈良県女性センター開設十周年とともに「奈良県女性行動計画」最終年のまとめとして」発刊できたと記す。次いで「夢がかたちに：

編さん経緯」を女性センター所長伊藤峰子が執筆。1992年度・93年度に「女性史入門講座」を開催、1993年５月に「ならの女性生活史」編さん委員会を設置、入門講座修了生から65名を調査員として委嘱して編さんを開始した。編さん委員会４回、執筆委員会13回、調査員は月に一度調査員会議、年表作成のための班会議、聞き取り調査のためのチームミーティング、学習会に参加したという。約300人に聞き取りを行った。

〈構成・内容〉

本書は３部に分かれる。Ⅰ奈良県女性のあゆみは、年表である（28～225頁）。１頁の下４分の１位に解説などがある。Ⅱは叙述（228～382頁）である。Ⅲは聞き書き集（384～501頁）となっている。叙述はⅡまほろばを翔たおんなたち（１明治時代の女性たち、２大正時代の女性たち、３昭和戦前期の女性たち、４戦後復興期の女性たち、５高度成長期の女性たち、６1970年代以降の女性たち、７二一世紀に向けて：現状と課題）である。Ⅲは１地域のくらし、２女性解放への歩み、３戦争や差別のない世界を希ってとなっている。

〈執筆者など〉

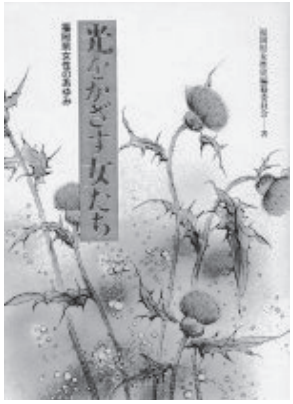
編さん委員委員長は青山茂、副委員長は徳田陽子、ほか11名の委員で構成、聞き書き監修委員は湯浅孝子・藤目ゆきである。年表作成は時代ごとに７班に分け、聞き取り調査は、教育、労働、運動、性、戦争・植民地、「家」制度文化・宗教、同和問題の７分野に分け、調査員を配置した。

〈特徴〉

叙述の中で、遊廓と廃娼運動（256～258頁）について書かれており、「娼妓開廃業数の推移」の表を掲載、「加籍送籍控」15年分が残されており、調査をしている。また、戦後のRRセンター（332～335頁）と廃止運動についても書かれている。

18 『光をかざす女たち：福岡県女性のあゆみ』

福岡県女性史編纂委員会著、福岡県編、西日本新聞社発行、1993年４月、A5判、532頁、2500円（税込み）。



〈刊行の経緯など〉

「より良い明日を拓くために　刊行にあたって」を福岡県知事奥田八二が執筆、「性による固定的役割分担意識が根強く残って」いるが、「地域の女性史に取り組む意義がある」と述べた。「はじめに」は福岡県女性史編さん委員会を代表して武野要子が執筆、「一年あまりの準備期間を加えて足かけ四年の研究調査の結果」刊行したという。県の婦人対策課（女性政策課）が女性史の企画を打診、編さん委員会が発足、編さん兼執筆委員11名を決定月１回の編さん会議を重ね、丸３年かけて１万８千枚の資料カードを作成。

〈構成・内容〉

本書は大きく 4 章に分けて叙述、巻末に1600年から1990年までの略年表（465～513頁）が付されている。叙述は次のとおりである。Ⅰ藩政時代の女たち（1 武家の女たち、2 町方の女たち、3 地方の女たち、4 浦方の女たち）、Ⅱ産む育てる暮らす（1 家制度下の女たち、2 女の一生）、Ⅲ学ぶ・遊ぶ（1 学校で学ぶ、2 社会で学ぶ、3 高揚し、放散する女たち）、Ⅳ性売買春（1 ゆがめられた性、2 性と愛の解放に向かって）、Ⅴ働く（1 近代化の成立と女の労働、2 戦後の働く女たち）、Ⅵたたかう（1 時代の閉塞状況の中で、2 国家体制と向き合う、3 戦後の女性運動）である。

〈執筆者など〉

編さん委員は、16名で内 4 名は県職員である。中に作家の森崎和江が含まれる。執筆委員は、17名で、編さん委員を兼ねた者以外に 6 名である。協力員が19名、年表委員が 4 名である。「本文は十七名の執筆者により分担執筆、該当する項の末尾に執筆者名を記した」とのことである。

〈特徴〉

まず、近世から書き起こされている。また、「あとがき」に書かれているが、「福岡県は近代に入って、身体を売るために海を渡って行った女たちの窓口」であり、「多くの炭鉱を抱えたこの地では、その採掘、運搬等であまたの女たちの労働力を必要」（529頁）とした。そこで、「Ⅳ性売買春」の章が設けられ、また、「Ⅴ働く」には、「石炭を掘る女たち」（326頁）と「Ⅵたたかう」に「炭鉱で働いた女たち」（398頁）がある。さらに、「女沖仲仕」（349頁）、「人間解放をめざした婦人水平社の人々」（409頁）も掲載されている。

19 『さがの女性史』

企画佐賀県、佐賀県女性と生涯学習財団編、佐賀新聞社発行、2001年 3 月、B5判、598頁、3239円＋税。

〈刊行の経緯など〉

「発刊にあたって」は、佐賀県知事井本勇が執筆、「新世紀の幕開けに」刊行できたことを喜ぶと述べた。さが女性プラン最終年のまとめとして、1997年度に企画され、翌1998年から 3 年をかけて編集刊行された。

〈構成・内容〉

本書は、3 編と年表で構成されている。本編・第 1 編で古代から近世までを「歴史の中の女性」として、第 2 編で近代から現代までをテーマ別に「部門史」として叙述、第 3 編は「聞き書き」となっている。さらに、明治元年から2000年までを年表（471～567頁）として付している。叙述は次のとおりである。第 1 編（総論女性史の視点、第 1 章古代の女性、第 2 章中世の女性、第 3 章近世の女性、結語「高群学」の視点）である。第 2 編部門史は、第 1 章学ぶ・育つ、第 2 章働く、第 3 章活動・創造する、第 4 章家族とくら

し、第5章女性の性、第6章戦争と女性、第7章データでみる佐賀の女性五〇年、第3編聞き書き（学びの場から、働く姿、地域づくりのために、文化を育んで、暮らしのなかで、戦争を生きぬいて）である。最後に資料があり、男女共同参画社会基本法も掲載されている。また、索引（人名索引・事項索引）がある。

〈執筆者など〉

編さん委員長は、佐賀大学名誉教授杉谷昭で、第1編を執筆。副委員長は細川章、そのほか17名の編さん委員がおり、県副知事・県教育長・県出納長・県総務部長・県企画県民部長が含まれている。執筆委員は編さん委員のうちの12名である。資料収集協力員が30名、聞き書き協力員が8名である。聞き書き指導は佐賀大学名誉教授米倉利昭、年表指導は佐賀新聞社論説委員田中好美である。

〈特徴〉

編さん委員に副知事や県職員、佐賀県立女性センター・生涯学習センター館長が加わっているように、県をあげての事業であったことがわかる。また、佐賀新聞社から発行され、新聞社の全面的な協力も得ている。総論で「女性史の視点」や「「高群学」の視点」が語られ、これまでの女性史研究が強く意識されている。「第6章戦争と女性」では、佐賀県出身ということで愛国婦人会創立者奥村五百子について詳しい（314～321頁）。同6章の「結語語り伝えたい女の苦しみ」（371～374頁）では、「被害者としての視点」と「加害者としての視点」が戦争と女性の総括として記されている。

20　『くまもとの女性史：本編』『くまもとの女性史：資料編』

くまもとの女性史編さん委員会編、くまもと女性史研究会発行、熊本日日新聞情報文化センター制作、2000年3月、A5判、本編701頁、資料編529頁。

〈刊行の経緯など〉

本編の巻頭は、まず熊本県副知事潮谷義子が「男女共同参画社会づくりのために」を執筆、福島譲二知事が刊行を望んでいたが、出版一月前に急逝した旨が記されている。次いで、熊本市長三角保之が「文化発展に大きな役割」を執筆、さらに、熊本県文化協会会長三浦洋一が「二十一世紀への贈り物」を執筆した。最後にくまもと女性史研究会会長安永蕗子が「ひたむきに生きた女性たちの歴史」で「平成六年の「高群逸枝生誕百年記念祭」において、女性史研究の宣言がなされて以来」取り組むことになり、刊行できたと述べた。熊本県全域で聞き書き等の調査を行うため、くまもと女性史研究会の「安永蕗子、永畑道子氏らが各地に出向き、組織づくり」から始めたという。聞き書きや資料調査に約150人、220編が集まった。

〈構成・内容〉

本編は、叙述と座談会：結びに代えて（642～661頁）、女性史関連略年表（664～683頁）で構成されている。叙述の間に「聞き書き」27編が収録されている。叙述は、序：風土論・女人感性の場、古代から近世（原始・古代、中世、近世）、近代（火の国の女：高群逸枝、たたかう女たち、熊本の花野、女と教育、女と性、働く女たち、暮らしの風景、戦後を生きる、座

談会）となっている。

資料編は、論考（3本）、聞き書き・証言、新聞記事に見る熊本の女性たちの歩み（391～523頁）である。聞き書き・証言は、地域ごとに分けられ、170編を収録、個人の活動・生き様などを象徴するテーマがつけられている。論考は、『くまもとの女性史』編集過程から生まれたものとのことである。

〈執筆者など〉

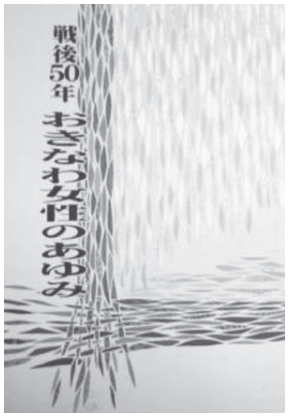
座談会の出席者は、くまもと女性史研究会のメンバー5人である。主な執筆者として41名の氏名が掲載されており、歌人でくまもと女性史研究会会長の安永蕗子をはじめ、作家の永畑道子、石牟礼道子、本田節子の名がある。また、研究会会員名簿も掲載されている。序は、安永が執筆、近代の最初「火の国の女：高群逸枝」（128～131頁）は永畑が執筆、「敗戦の日」（532～533頁）は永畑の文章の引用、暮らしの風景「男さんのこと」（452～456頁）は石牟礼の著書から抜粋、本田は、「御松囃しのふるさと」（604～605頁）、「宮崎家の妻たち」（624～626頁）他を執筆している。聞き書きは、話し手が文頭にあり、聞き手は文末に記載されている。

〈特徴〉

高群の生誕百年記念祭から女性史の構想が始まったように、高群女性史の影響が強いといえる。本編中世の扉文（63頁）には「女性史研究の先駆者」と紹介、近代も「火の国の女：高群逸枝」に始まる。本編だけで、一応熊本女性史として完結しているといえるが、集まった聞き書きと、論考を生かして資料編が作成され、同時に刊行された。2冊は、同箱に収まる。

21 『戦後五〇年：おきなわ女性のあゆみ』

「戦後50年おきなわ女性のあゆみ」編集委員会編、事務局おきなわ女性財団、沖縄県（総務部知事公室女性政策室）発行、1996年3月、A5判、503頁。



〈刊行の経緯など〉

「発刊を祝して」を内閣総理大臣官房・男女共同参画室長名取はにわが執筆。「発刊にあたって」を沖縄県知事太田昌秀が執筆、「太平洋戦争・沖縄戦終結五十周年事業の一環として」発刊、「一年という短い期間で」完成したと述べた。「あとがき」でも県の単年度事業として企画され、1995年5月に「掲載人物検討のためのリストづくりからスタート」、10名の委員で「編集委員会が発足」、7回の編集会議を行ったという。

〈構成・内容〉

本書は、人物編と資料編に分かれ、人物編の間にコラムがある。資料編の中心は「戦後五十年おきなわ女性のあゆみ年表」（392～481頁）である。年表は1頁の下3分の1ほどが解説となっている。人物は167名で「さまざまな分野における多様な女性たち」を対象としている。コラムは9編で、「戦前の女性たち」、「基地と女性たち」、「女性の社会進出」、「沖縄芝居に生きる女性たち」などである。

〈執筆者など〉

編集委員は、玉城隆雄を委員長に10名、沖縄女性史研究家外間米子・比嘉道子のほか、沖縄タイムス論説委員、沖縄県女性政策室長などである。執筆者は約90名で、人物紹介の末尾に執筆者名が書かれている。

〈特徴〉

人物編を約800名の候補者の中から、167名にしたといい、「女性初」を中心に、種々の分野で活躍した女性を写真入りで見開き2頁で紹介している。中には、戦前大阪市立市民館で保母として働き、戦後関西主婦連合会2代目会長となった比嘉正子なども含まれている。

Ⅱ　成果と課題

1　自治体女性史を閲覧して

①　刊行の経緯について

21都府県の自治体女性史は、富山・石川・熊本を除いて、すべて巻頭に知事の言葉が添えられている。3県の内、富山は、知事が座談会に登場し、熊本は、知事が刊行の一月前に急逝され、副知事が巻頭に言葉を寄せた。石川は、県からの補助を受けているが、「各種女性団体連絡協議会」の出版ということで、知事は登場していない。

企画出版は、早くて単年度（沖縄）、編集委員会などを組織して、ほぼ3年から5年をかけて刊行している。ほとんどの県では、名称は異なるが、編集委員会が作られ、内容を検討し、年表作成、聞き書きなどをおこない、また執筆者をきめて叙述している。

②　構成・内容について

一巻本がほとんどで、秋田・埼玉・東京・石川・熊本が2巻本である。秋田は、時代別の2巻で明治・大正を上巻、昭和から現在を下巻としている。埼玉も時代別で、明治から昭和初期を上巻、昭和戦前期から昭和五〇年頃までを下巻としている。東京は、年表と通史を分けている。石川は、先に明治から戦前まで、後に戦後編を刊行した。熊本は、本編と資料編で、本編編集の過程で生まれた論考や、本編に収まらなかった聞き書き、新聞の記事年表を資料編とした。

構成は、通史の叙述、聞き書き、年表を掲載したものが多い。時代は、昭和50年までの「激動の五十年」を扱った岩手県、「自立へのあゆみ」として戦後を扱った富山県、「戦後五十年」を取りあげた東京都、「戦後五〇年」とした沖縄県以外は、近現代を中心に取り上げている。ページ数は少ないものの通史を古代から叙述したのが福島県、茨城県、京都府、佐賀県、熊本県であり、近世から叙述しているのが、青森県、福井県、「前史」としておいた岐阜県、「藩政時代」から叙述した福岡県である。

③　執筆者について

自治体女性史の中で、最初に出された岩手県は、個人名が一人だけで、県の種々の部署（課）が、担当している。県の諸課が分担執筆のようなこの形は、ほかには見られない。東京都は女

性財団が編集を担当、佐賀県でも女性財団が設立されたが、女性財団とは別に女性史を県が作成した。既存の女性団体が、女性史の編集を担当したのが富山県で、婦人団体連絡協議会が県の委託を受けて編集し、県が発行した。石川県は各種女性団体連絡協議会が、編集委員会を構成して、刊行した。多くの府県では、女性史を刊行するために、編集委員会を発足させている。そして、編集委員会はもちろん、研究会を行っている場合もある。また、聞き書きや年表作成のための協力員や調査員を公募している県も多い。京都府は、女性団体から協力者を募り、執筆は研究者が担っている。通史の叙述は、時代で区切っているもの、宮城県や岐阜県のようにテーマ別に章立てしているものなどがある。

④　特徴について

通史の叙述、聞き書き、年表の3部構成をとっている自治体女性史が多い。年表を作成したうえで、また並行して通史的叙述に結び付けている場合が多い。年表の作成は、地元新聞やそれぞれの県史・教育史・市町村史などをもとにして、関係書籍、全国の年表、雑誌から記事を取っているものもある。年表では、宮城県・三重県・福岡県が出典を明記しており、研究を継続する糸口になる。年表の事項そのものに出典がつけられていない場合も、神奈川県や岐阜県、奈良県、沖縄県では年表への解説がつけられており、そこに出典が示されている。

一般女性の聞き書きは、自治体女性史の場合、地域的偏りがあまりないように配慮されている。茨城県では、聞き書き調査協力員が43名で、「話者」の候補者は約500人、その中から99人の語りを掲載した。神奈川県でもワーキンググループによって聞き書きが行われ、80人を掲載した。岐阜県では、聞き書き調査協力員49人が200人余りから聞き取りを行い、50人しか掲載できなかったため、別冊を作成して、記録として残るように配慮した。京都府では130名の聞き書きを掲載、奈良県では約300人に聞き取りを行い、7分野に分けて掲載した。沖縄県は聞き書きを主体として作成されており、約800人の候補者から167名を対象として聞き取り、掲載した。

2　自治体女性史の成果

本稿では、都府県による「自治体女性史」を取り上げ、その内容を紹介してきた。自治体女性史は、都道府県市区町村などの行政の一定の枠組みの中で、その地域に根ざし、全国の動向との関係や地域の独自性などに焦点をあてて編さんされている。そして、自治体が、経済的・人的支援を行い、大掛かりなまた財政的裏付けのもとで刊行される。全国への発信や、地域内の図書館・学校などに配布されることにより、地域内の人びとの目に触れる機会も多い。

地域女性史は、1960年前後から自主的研究グループ（女性史研究会など）により、担われ成果の発表も行われてきた。2000年の段階ですでに、47都道府県すべての地域で、何らかの地域女性史が刊行されている[(5)]。1977年からは、各地の地域女性史グループが、一堂に会し、成果や課題を話し合う「全国女性史研究交流のつどい」が開催され、2015年の第12回まで、実行委員会形式で開催された。それらの高まりを背景に、2014年「地域女性史研究会」が折井美耶子を代表に創立され、自主的地域女性史研究は、進展を続けている。折井氏は「行政と

の連携」について、プラス面として、「①一定の経済的な裏付けが得られること」、「②資料収集や聞き書きなどの場合、相手の信用を得られやすいこと」、「③住民参加による編集が多いこと」の3点をあげ、「自治体史の場合はほとんど専門家の手によるもので、住民とは無縁に編集されることが多いが、女性史は公募の住民と専門家が協力」して編集・執筆されることが多いと述べた。そして、「問題となる点」として、「年度内の出版が義務付けられて、納得のいくまで十分な調査研究ができないきらい」と「内容や表現に制限がつく場合があること」をあげた(6)。

折井氏の指摘と重なる面もあるが、「Ⅰ自治体女性史の概容」から成果をまとめておく。

①　47都道府県の内、21都府県から出版されたこと。半数には満たないが、これだけの自治体で女性史が刊行されたことは、特筆される。福岡県では、「岩手県、神奈川県、富山県についで全国で四番目という画期的な仕事」（あとがき）と述べているように、わが自治体でもできるという一種のブームをよび、次々に自治体女性史が編さんされた。筆者は「第6回全国女性史研究交流のつどい '94やまがた」に岐阜県女性史研究会の度会さち子氏と参加、岐阜県女性政策課の職員も参加、岐阜県での女性史づくりに取り組むことになった。第7回つどい（神奈川）は1999年に開催され、分科会「9地域女性史」では、「Ⅱ行政とのかかわり」が議論された(7)。

また、今回本稿では、都府県の自治体女性史を取り上げたが、東京都では、区単位の女性史の編集も行われており、大阪の枚方市や岸和田市、沖縄の那覇市など各地で市単位の女性史も刊行されており、それらの成果もみられる。

②　それらの自治体女性史（市区女性史も含め）には、全国的な通史や女性史では、知られていない新知識が叙述や掲載されている。Ⅰの各自治体女性史の特徴で指摘したように、地域で活躍した女性の存在や戦時中の大陸への移動・引き揚げも村単位で行うなど実態が詳述されている地域もある。年表も詳細に検討すれば、そこからテーマを見出すこともできよう。

③　自治体女性史は、経済的・人的支援が大きい。折井氏も指摘したように、出版にかかる費用が保障される。また、その普及も全国の都道府県公共図書館や、自治体内の図書館・学校などに行われる。聞き書きや年表作成に多くの自治体で公募のボランティアが採用されている。聞き書きは、前述のように、200人から800人という多人数を対象に、地域にかかわる調査員が訪れ、聞き取りを行い、執筆している。本編に掲載できず、別冊を作成した例もある。年表についても、筆者は大阪女性史研究会のメンバーであるが、数人から十人以下の研究会であり、新聞を調査し、女性に関わる事項を書き抜き、年表を作成するのは何年がかりというような非常に多くの時間を費やし、刊行も自費出版でまさに手弁当の作業を行ってきた。それに比べ、自治体では、専業の担当職員を置くこともでき、各市町村史・教育史なども容易に閲覧でき、県史の作業などとも連携して作業ができることもあり、短期間で充実した年表が作成されている。出典が明記された年表もあり、今後の研究にも活用できる。

④　岐阜県女性史のところで述べたが、女性史を刊行後、成果をどのように生かすか編集委員会で「全国女性史研究交流のつどい」の招致を提案、岐阜県の後援をうけ、岐阜県図書館を

会場に第8回つどいを「自治体女性史を考える」をテーマに実現した。また、奈良県では、女性史編さんに3年がかりで年表作成と聞き書きに200人近くが参加した中の有志で、翌年奈良女性史研究会を発足させ、その活動10年を記念して、第10回つどいを開催した(8)。このように、自治体女性史の編集から、女性史研究会の立ち上げに至り、つどいを開催するなど、研究の継続、他地域や自主的女性史研究への関わりにつなげた地域も現れた。

⑤　青森県のところで紹介したように、自治体史との関係を構築した地域もある。沖縄県は、本稿で紹介した『おきなわ女性のあゆみ』との関係ではないが、那覇市の女性史編集事業と結びついて、『沖縄県史　各論編第八巻女性史』が刊行されたという(9)。自治体女性史は、1巻か2巻で掲載内容も限られる。それに比して、自治体史は大部なものが多いので、タイミングもあるが、それとの連携も視野に入れられると良いが、一部では実現したといえる。

3　自治体女性史の課題

以下、課題について述べていきたい。

①　国際婦人年と国連婦人の10年を受けた各地の女性政策の進展の中で、女性史の編集を打ち出したところがあり、1981年の岩手県を嚆矢として、1980年代4件、1990年代13件、その内10件は90年代後半、2000年以降は5件で、最新が2009年であり、2010年以降は刊行されていない。一種のブームが去った感は否めないが、市区単位も含め、自治体女性史は、地域と女性への関心の求心力であり、今後も継続されることを望む。編集委員会などである程度練られた指針にもとづき、与えられた作業を多人数でこなす年表づくりや聞き書きは、もともと共通の認識や問題意識を共有して創立された自主的な研究グループとは異なるが、一気に成果として現れ、研究継続の基盤となる。その点でも、自治体女性史は継続されるべきである。この継続の内容としては、刊行後の研究会も含む。

②　自治体女性史の叙述・聞き書き・年表の活用と、集められた資料の保存・活用を明確にして、どこにどのような形であるのか、利用する方法などとともにわかるようにしてほしい。自治体史などでは、資料編なども出されたりしているが、自治体女性史の場合は、紙数も限られているため、集められた資料の保存・活用が可視化されるべきである。

③　一部では実現しているが、自治体史との連携がはかられるべきである。また、県として力を入れて取り組んでいる自治体史に女性史がきちんと入れられるべきである。このことは、別稿(10)で述べている。

④　これまでの成果を生かす取り組みがなされるべきである。岩手県の女性史が国立国会図書館でデジタル化の作業中であることは紹介したが、紙媒体を手に取ることは見やすさなど、良い面もあるが、増刷などが難しい自治体女性史が、どこにいても閲覧でき、活用できるようなデジタル化がはかられても良いのではないか。既刊については、自治体の女性政策課などに要求してはいかがだろうか。

おわりに

ここまで、自治体女性史の概容を紹介し、成果と課題について考察してきた。その上で、繰り返しにはなるが、別な視点からの提案も行っておきたい。まず、自治体女性史の刊行が難しい場合も、地域の自主的グループへの種々の支援を提案する。補助の内容は、研究会や交流会への補助：場所の提供や出版助成などをぜひ実現していただきたい。女性政策の推進の中で、「男女共同参画川柳」など、各地でユニークな取り組みがみられるが、女性問題への出版助成など女性史だけに限らず、地域の自主グループを支援する取り組みを充実させ、女性史もその中に位置づけられれば良い。

つぎに、自治体史の中で、女性史の叙述を求めたい。自治体史の編さんにおいて、女性問題・女性史に敏感な視点を持つ歴史研究者をいれ、また地域で活動している女性団体から委員を入れるなど目配りの行き届いた市民によりそう自治体史の編集を求めたい。

註

⑴　2021年3月、217頁。なお、同稿236頁の註⑽で、「筆者は、愛知県から『愛知県史通史編7近代2』・『愛知県史通史編8近代3』を寄贈していただいた」と記したが、同2冊は、執筆者伊藤康子氏のご好意により、筆者に寄贈されたものであったので、お詫びして訂正したい。

⑵　「最近の自治体史編さんと女性史」（『歴史評論』855号、2021年7月号）、18頁。『岐阜県女性史：まん真ん中の女たち』は、岐阜県発行、2000年10月。筆者は、編集執筆委員を務め、「第6章女性の運動」（341～402頁）を執筆した。

⑶　『歴史評論』855号、2021年7月号、引用文は30頁に掲載されている。

⑷　拙稿「ごあいさつ」・「パネルディスカッション“自治体女性史を考える”〈全体会のテーマ設定について〉」（『第8回全国女性史研究交流のつどいinぎふ報告集』2001年9月）、拙稿「『岐阜県女性史――まん真ん中の女たち』の執筆を終えて」（『桜花学園大学研究紀要』第3号、2001年3月）、拙稿「第八回全国女性史研究交流のつどいについて」（『歴史評論』第624号、2002年4月）。

⑸　折井美耶子『地域女性史入門』（ドメス出版、2001年）所収の「地域女性史文献目録」154～207頁。

⑹　同前、40～41頁。

⑺　『第7回全国女性史研究交流のつどい報告集』1999年3月、WAN（ウィメンズ・アクション・ネットワーク）「ミニコミ図書館」で閲覧。

⑻　『奈良女性史研究会20周年記念号』2017年7月、9頁。

⑼　前掲註⑶に同じ、33～34頁。

⑽　「日本近代女性史と自治体史」（『桜花学園大学保育学部研究紀要』第23号）235頁、前掲註⑵「最近の自治体史編さんと女性史」21頁。

（受理日　2021年9月15日）